

名湯・秘湯で湯浴みする(その二五)

〔五三〕冬の東北へ(二〇一三年)

一／一九(土)

本厚木	八〇四
新宿	八五〇
東京	九〇六
	九一八
新 潟	九二八Mとき三二五
	一一三一
	一二三〇いなほ五
坂 町	一三一
	一三三三
小 国	一四一一
バス	一四四三
小 学 校	一五二三・三好荘(泊)
	〇二三八―六四―二二二〇
一／二〇(日)	
小 学 校	九一七
小 国	九五七
	一〇一二
米 沢	一一二九
	一一四七つばさ一三八
福 島	一二二一

一／二二(月)

一／二三(火)

古 川	一三五六
	一四一二
鳴子温泉	一四五五琢秀(泊)
	〇二一九―八七―二二二六
鳴子温泉	二〇〇四
古 川	一一四九
	一一五六やまびこ五五
盛 岡	一二五二
バス	一四三〇紫苑(泊)
	〇一九―六八―九―二二八八
つなぎ	九五〇
盛 岡	一〇二〇
	一一四一はやて二二
東 京	一四〇八
	一四二五
新 宿	一四三九
	一五〇一
本厚木	一五五五

折 挟 Y

JR東日本大人の休日倶楽部ジパングの四日間一五〇〇〇円パスが二〇一三年一月中旬適用で発売された。この手のパスは毎年、一月・六月・九月の年三回発売されるしきたりがこのところ続いており、私たちは一月の売り出しを待って東北への旅行を企画することに決めていたのだった。四日間ということは三泊ということであり、旅の中心はこれまで何度も訪れて楽しんで中山平温泉・琢秀にあり、その前後をどう回るかに腐心した。

候補地選択の参考資料はまず『日本の秘湯』日本秘湯を守る会の監修で事務局担当の朝日旅行から出ている。二、三年ごとに発行されるのだが、最新号は二〇一二(平成二四)年三月刊で一八八軒の会員宿の情報が収録されている。JTB監修の『ゆこゆこ』や近畿日本ツーリスト系のクラブツーリズムが刊行する各種旅行情報誌も候補源であり、他にテレビの旅番組からの情報を参考にもある。

今回は二日目に琢秀を考えたので、一日目は新潟・山形・福島辺りから選ぶことにして『日本の秘湯』を当たったところ、山形県の泡の湯温泉が浮かんだ。掛け値なしの掛け流しであること、湯の温度が三八℃ほどの温湯であることが気に入ったのだ。普通私の入浴

はいわゆる鳥の行水で合計一五分も入れればもう出てくる湯である。頭髮を洗うとき以外は石けんの類いを使わない。無論、手ぬぐいを湯船につけることはないし、上がり湯を掛けることもしない。これが温湯であれば入浴時間は増えて三〇分とか、一時間とかになる寸法である。だから温湯が選ばれることになるのだ。ところが、カミさんは普通の風呂でも三〇分は優に入っていて、温湯はあまり好まない。特に今回は一月中旬という季節で、雪の多い地方へ出向くということから、あまり気乗りはしないというふうであった。

旅行の日程が近づいた一月一四日、珍しく関東地方一円に雪が降り、東京や横浜でも積雪何センチとかが話題になるほどだった。雪に慣れていない首都圏だから、ちよつとした雪でも交通事故は頻発し、怪我人も続出する事態となった。山形県小国町にある泡の湯温泉へは、当初、米沢から入るつもりでいたのだが、列車の待ち時間などを勘案すると、新潟から回るほうが都合のよいことが判って、新潟・坂町・小国のコースを取ることにしていたので、その方面の天候には注意を向けていた。一四日の積雪の後テレビの気象情報では、北日本から西日本の日本海側は大雪になるとの予報を出している。コースを新潟回りにしたことで、旅

行当日、羽越線や米坂線が不通になることも覚悟しなければならぬかと密かに案じたのだった。

万一の場合は、湯田川温泉・湯どの庵とか、福島県高湯温泉・吾妻屋とかに振り替え泊を依頼することになるかなどと考えながら、東京から上越新幹線に乗った。途中、越後湯沢辺りではかなりの積雪で心配が現実のことになるかと思ひながら新潟に到着してみると、お天気は快晴で積雪はほんのわずかという状態だったので、少し安心した。改装なった新潟駅ビルの中で昼食を摂り、羽越線に乗って坂町へ着いた。案じていた米坂線は平常通りの運行で、まず一安堵し定刻通り発車した一輛編成の米坂線気動車の乗客となった。

四〇分ほどで小国到着。三〇分の待ち合わせで路線バスに乗るまで、小国駅構内の待合室で待機したが、ここは比較的大きな駅で、エアコンも設置されていて快適な待ち時間となった。さすがに豪雪地帯だけあって、駅前のロータリーも三〇センチほどの積雪。このときのために履いていた雪靴が効果的で大いに役立ったのが嬉しかった。

定刻より五分遅れで路線バスがやってきた。乗客は私たちだけ二人で小玉小中学校前まで四〇分ほど雪道の中の走行となった。路線バスだから目的地まで一直

線というわけには行かず、病院前とか、役所前とかを経由するためあちこちで回り道となった。道中は小雪が降るといふ状態だったが、道路も道路脇も雪がたかさん積もっていて、雪中行軍とはこのことかと合点するようだった。乗っていたバスは途中こちらがちよつとはらはらするぐらいの速度で走行し予定時間の一分遅れで目的のバス停に到着した。

ここで出迎えてくれていた泡の湯温泉・三好荘の若主人の送迎車に拾ってもらい、一〇分ほどで宿到着となった。温泉回りの路線バスも時間によっては出ているとのことだったが、私たちの場合は迂回するバスだったのだ。バス停から宿までももちろん雪中行軍で、所々で除雪作業をしている老人を見かけた。集落全体に若い人はほとんどいず、老人パワーで集落が維持されていると伺った。

泡の湯温泉・三好荘は客室が一四室ほどの小さな宿で雪の多い冬場はお客が少ないが、季節が来ると、飯豊連峰登山客や新緑、山菜採りの客、紅葉狩り、キノコ狩りを楽しむ客などで利用者も多いという。事前情報のとおり、湯は三八℃ほどの温湯で確かに冬場には向かない感じである。何故、加温などで適温にしないかを問うと、若主人は「温度を上げると二酸化炭素が

飛んでしまうから」と仰る。全国でも珍しい炭酸温泉の炭酸がなくなってしまうとあつては加温はできない相談なのだ。岩の割れ目から吹き出す炭酸ガスが泡をなすところから「泡の湯温泉」と名付けられたという。その炭酸こそ当館のシンボルに他ならないからである。

三好荘は九〇歳になる祖父とその連れ合いに孫の若主人夫妻と母という典型的な家族経営の宿で、夕餉の料理も山家料理だが、手の込んだもてなしの気持ち溢れる数々の皿が並んだ。あの北大路魯山人が絶賛するワラビもおひたしや煮浸しなどで供されている。イワナも定番の焼き物の他お造りで食卓を飾るといふ具合だ。山形市で料理の修業をしたという若主人の発案になる生タラの大葉包み天ぷらがたいそうな美味であった。往復の短い送迎の中で伺ったお話では、何か買い物ということになると新潟へ出かけるとのこと、山形市まで車で三時間かかるのに比して新潟は二時間で行けるからというのが面白かった。魚介類も新鮮なものが容易に手に入る由。岐阜の穂高温泉郷の人たちが富山へ出て買い物をするのに通じていると思った。

復路の路線バスではハラハラしどろしどろだった。バスの時刻表では小中学校前九二七発小国駅前九五七着となつているが、往路で経験したように、雪中行軍だか

らある程度の遅延を覚悟しなければならぬと思われたからだ。小国からの米沢行きは一〇一二発。時刻表通りだとしても一〇分余の猶予しかないのだ。バスは四分遅れで到着した。乗り込む際運転手さんに「一二発の米沢行きに乗りたいたのでよろしく」と声を掛けた。何の答えもなく発車したのに一抹の不安が湧いた。幸い、日曜日の朝のことだからだろうが、道路は空いている一〇分ほど快調に飛ばしたバスの前に軽トラックが道を塞ぎ、安全運転のためか、ノロノロ走行である。これじゃあ間に合わないかも、などと運転手さんが呟く。相当イライラが募ったとき軽トラックがある店の先に停まるために車を左に寄せた。お陰でまた路線バスは快調走行を回復することができたのだった。結果として、遅延四分のまま駅に着くことができたので一〇〇一の到着。米坂線の改札が丁度始まるころで、ようやく緊張を解くことができたのだった。もし、この快速列車に乗り遅れたら、次の一四一一米沢行きまで丸々四時間を何もなし小国駅で待つことになるところだった。四時間を待つて既定のコースでこの日の宿にいつ頃着くものか、見当はつかなかった。米沢から新庄経由で鳴子温泉を目指す手もある。一一四六発の下りで坂町へ行き羽越線で余部を経由して陸

羽西線で新庄へ回ることも検討の対象となるだろうと思つた。いずれも細部を検討する資料がない。小国駅で待つことになれば、これらを比較検討して琢秀を目指すことになると思われた。

小国駅の階段を上り下りして上りホームに降り立ってみると、気動車の走る線路は完全に雪の中に埋まっている。これで走れるのだろうかと訝つたのだが、気動車は定刻に到着し米沢に向けて発車した。線路が雪に埋まるくらいでは走行の障害にはならないらしく、定時に米沢に到着した。

予定どおり、福島・古川・鳴子温泉と回って琢秀には一五時過ぎに到着した。東日本大人の休日倶楽部ジパングの会員。バスで琢秀を訪れるお客も多く見受けられ、この秘湯の宿は満杯の印象だった。風呂も宿も何度となく訪れていて、館内地理は誰に聞くこともなく勝手知つたる我が家の感じだった。食事処でいただく夕食もいつも通りで、料理には定評があり、十分満足行く内容だった。

三日目は盛岡のつなぎ温泉。あることは知っていたが訪れるのははじめてのことである。つなぎ温泉は歴史も古く、その昔、八幡太郎義家が立ち寄って馬をつないだ石が現存するという謂われから温泉郷の名前が

誕生したという。

宿は『ゆこゆこ』を見ていたカミさんが一度行つてみたいと選んだホテル紫苑で、盛岡駅前から送迎のためシャトルバスが何本か出ている。西口バスターミナルから二〇分ほどで宿に到着した。紫苑は大きな施設で七〇〇名収容、一二七室を備えている由。大きな宿だから万事マニュアル通りのサービスを覚悟したが、客室係も特にマニュアル頼みというふうではなく、まずまずの応対だった。風呂は源泉掛け流しを標榜する中型のものと大きな大浴場があり、大浴場には露天風呂、ジャグジー、スチームバスなど各種の風呂が付属している。夕食は部屋食であるが、品数も内容もなかなかのものだった。部屋から人造湖の御所湖の眺望が見事で、雪景色の中のダム湖は見応えのある風景だった。

最終日の四日目はシャトルバスで盛岡へ出て、駅ビル内で土産物を調達し、その時間に合わせてはやてに乗った。少し前までなら、せめて市内を巡るとか、宮古辺りまで足を伸ばすとか、何かプログラムを用意したものだったが、段々と足腰がいうことを聞かなくなつて、どこかへ回る元気を失い、まっすぐのご帰還という仕儀となった。年なりの旅の楽しみ方になってい

るといふことだろうか。



小国駅構内にて



雪の米坂線気動車

「五四」寝台特急トワイライトに乗る(二〇一三年)

公立学校共済組合の宿を利用して一万円分のポイントが貯まった。これは公立学校共済の宿で利用するのがもともと自然であるので、カミさんや娘朋子・孫佳奈が何度か利用している京都嵐山近くの「花のいえ」に泊まってみる気になった。東海道新幹線方面は大人の休日倶楽部ジパングの会員パスを使える機会はほとんどないから、パスはフルムーン利用となるわけで、そうとなれば、札幌から大阪へ通じている寝台特急トワイライトに乗ってみるのも面白いと思った。

寝台特急北斗星には一度乗ったことがある。私には特別な感懐はないが、カミさんは結構興味があるらしく、カシオペアに乗りたいたいという。カシオペアには大人の休日倶楽部ジパングもフルムーンもただでは乗れないからずっと敬遠してきたのだが、トワイライトにはフルムーンで乗れる座席がある。切符は一ヶ月前の一〇時発売だから、二月一二日の一〇時過ぎに平塚駅へ赴いて切符の手配をしたところ、フルムーンパスで乗れる座席二枚は飛び飛びでなければ空いていないという。やむなく離ればなれの席を確保して帰宅したと

ころ、カミさんは、離れた席では心配で寝台車には乗れない、第一晩飯はどこで食べればいいか、不安だと言う。仕方がないので、もう一度平塚駅へ行つて有料の席ならあるか、と聞くと、一室だけ空きがあるという。

運賃はフルムーンに含まれているから無料だが、B寝台車二人用個室料一六三二〇円と特急料金六三〇〇円を負担しろという。係員はそれが決まりだからと言って、当たり前のように言うのだが、室料は有料だとしても、特急料金を払うのは二重払いの気がして気が進まない。パスだけで乗れるBコンパートメントが現在あるからである。係員と言いつても埒のあく話ではないので、仕方なく規定通りを支払って一件落着とした。

三／一一(月) 本厚木 七一三

新宿 八三八

東京 九三六はやぶさ三

新青森 一二四六

一三〇三S白鳥一九

函館 一五一六

一五一八S北斗一三

登別 一七二七ゆもと登別(泊)

〇一四三十八四一二七七

三／一二(火)

登別 九二三S北斗一  
札幌 一〇一八

一四〇五トワイライト

三／一三(水)

敦賀 一〇三六  
一四二二

気山 一四四八虹岳島荘(泊)

〇七七六四五〇二五五

三／一四(木)

気山 九〇三  
敦賀 九三〇

九三九TH一二

京都 一〇三七花のいえ(泊)

〇七五八六一一五四五

三／一五(金)

京都 一四二九ひかり五二四  
小田原 一六三六

出発日は奇しくも三・一一、あの東日本大震災の日と重なった。旅行の日程を決めるのにさほどの事情があるわけではないから、どうしても避けようということなら避けられないでもなかったが、土日にかからないうで、トワイライトが走っている日、それもカミさんの誕生日三月五日にできるだけ近い日、となると三・

一一出発しか選べなかったのだ。

あの災害の日から二年経過することとなったが、新聞報道によれば、二月二七日現在、震災による死者一五八八〇人、行方不明者二六九四人、避難者三一五〇〇〇人に及ぶという。鉄道はJR山田線・宮古線・釜石間、JR大船渡線・盛線吉浜間、JR気仙沼線・気仙沼柳津間、JR石巻線・渡波女川間、JR常磐線・亘理相馬間、同原ノ町広野間、三陸鉄道北線・田野畑小本間、三陸鉄道南線・盛釜石間でまだ不通が続いている。資材の高騰と労働者不足のために復興は進まず、瓦礫の処理もまだ五〇％に達していないという。こういう場面にこそ、政治の出番があるはずなのに、政治はほとんど役に立っていないのが実体のようで何とももどかしい。

旅には人情の機微とか綾とでも言うべき事象に出くわすことが多く、今回もまた同様だった。列車を乗り継いで登別に着く。さほど寒くはないが、さすが北海道だけあってそれなりに寒く感じる。途中の吹雪で一〇分ほど特急列車の到着が遅れて、予定した路線バスが来るかどうか危ぶまれたので、タクシーを待つことにして乗り場に並んだ。最初の一台はまずまずの時間で到着して、私たちの番になったが、かなり待たされ



た。お客を乗せたタクシーが着いてお客を降ろすと、運転手さんは私たちのほうは見向きもせず、駅の待合室に入っただけで予約のお客を乗せて出る様子だった。予約が入っていたのなら仕方がない、次を待つか、と覚悟を決めると、その予約のお客、初老のご婦人が話しかけてきた。

「どちらへお出ですか」

「登別温泉までですが」

「それなら、私も同じところへ行きますので、よろしければ一緒にいかがですか」

次のタクシーが来そうにない様子だったし、ちよつと寒かったこともあって、初老婦人の言葉に甘えることにした。すぐに会話が弾んだわけではないが、この方、三〇年ほど北海道に暮らしていると仰る。今年の冬は寒い、雪は例年の半分ほどである由。

「お宿はどちらですか」

「ゆもとホテルです」

「ゆもとホテルならバス停の前で、このタクシー会社の真ん前ですわ」

タクシーがゆもとホテル登別の前に横付けされると、その初老婦人はその先まで行くと言うので、私は、同乗させていたただいたお礼を言いながらメーター料金一

六〇〇円ながしを見て二〇〇〇円を出し、運転手さんに渡そうとするのだが、運転手さんは婦人に止められて受け取れないと言う。しばらく押し問答となったが、どうしても埒が明かないので、一〇〇〇円札一枚を婦人に手渡し、タクシー料金を折半することにして車を降りた。

「第一滝本館で女将をしております。明日、熊牧場にお出かけの節、是非私どものホテルにお越しいただきたい、温泉をお楽しみください」と仰るではないか。

お話しの間々に、北海道にも、登別にも、温泉にも詳しい、並々でないご婦人と感じていたのだが、第一滝本館の女将とは気づかなかつた。第一滝本館と言えば、登別温泉線随一のホテルで全国に名を馳せている名旅館である。ものの本に拠れば、「(前略)浴場のスケールの大きさは、わが国でもトップクラス。その面積は一五〇〇坪。バス一七〇台が入るほどの広さで二九もある浴場の湯量を合計すると家庭風呂の五〇〇〇軒分に相当するとか。巨大な大浴場に感嘆の声を挙げ、ガラス越しに地獄谷が見える展望風呂や蒸気風呂、打たせ湯に心も騒ぐ(後略)」とある。

このホテルは、その昔、小学校からの親友岡本行生君と大学二年の時誘われて北海道旅行をしたときに宿

泊した記憶がある。その頃岡本の兄が北海道庁勤務で旭川に居を構えていた縁で彼が計画を立てた旅だった。滅多に晴れないと言われる摩周湖をくつきり見せてもらったり、屈斜路湖・川湯・弟子屈などを經由して札幌で遊んだことを思い出す。貧乏学生にしては随分贅沢な旅行だった。この岡本が食道ガンで他界したのは二〇〇〇年四月、あれからもう一三年が経過しているのだから、時の流れは何と速いことだろう。

女将の招待をいただきながら、今回の旅では第一滝本館の豊かな温泉を堪能することができなかつたのはとても残念なことである。いずれ機会を見てとも思うが、それがいつやってくるのか心許ないことおびただしい。

ゆもとホテル登別は、『北海道の温泉 源泉・掛け流しの湯』という本を見て選んだ宿であるが、ゆつたりした癒やしの宿だった。収容人数二〇〇人ほどのホテルと聞いたが、この手のホテルにありがちな「万事マニュアル頼み」のふうはなくアットホームな雰囲気。スタッフが「桜姫鶏のすき焼きとホタテと桜エビの釜飯が売りの夕食もいくつかの源泉による浴場の温泉もともに満足の行くものだった。

二日目は予定より一本早いS北斗で札幌へ行った。

たつぷりある時間を使って昼飯を認め、寝台特急に乗るその日の夕食と翌日の朝食の調達に当たるためだった。寝台車についている食堂車での食事は考えもしなかった。夕食はフランス料理一〇〇〇円、朝食六〇〇円、朝食は和洋とも一五七五円で、決して安価とは言えない。しかも朝夕いずれの食事でも三〇分の制限タイムとなっていて、食事をゆつくり楽しむことはできない。ビールやワインなら飲むことはできるかもしれないが、焼酎というわけには行かないだろう。

旅先の綾は寝台特急にもあるのだった。車内放送によつて食堂車案内が流れる。聞けば、容れものさえあれば白湯は無料であり、氷は紙コップ一杯分で一〇〇円という。当方は焼酎のために氷は不可欠だからこれを求めに宿泊の六号車から食堂車の三号車へ移動した。簡便な魔法瓶も携行して白湯も手に入れた。氷を買い求めるついでに、つい、水もくださいと言ったところ、水は自動販売機で買ってくれと言う。そう、水はただでは手に入らないのだった。白湯なら無料だが、水は有料という、この辺が面白い綾の所以である。

トワイライトの停車駅がどういう経緯で現行のものとなったかはなほだ理解に苦しむ。札幌を一四〇五に出發して、南千歳・苫小牧・登別・東室蘭・洞爺と小

最初に停まった後、停車するのは新潟県新津で、それも早朝四三三のことである。道内でたくさん停まるのは悪くはないが、肝心の函館に停車しないのはどういうわけであるか。こちら辺ではどこかでスイッチバックしなければ海峽線に入ることはできないはずだから、スイッチバックのための停車を特急の停車駅にすれば利用者にとつてありがたいはずである。確認したところ、スイッチバックは五稜郭駅で行つて機関車の付け替えをするのだそうである。そうとなれば、五稜郭でもいい、正式な停車駅にすべきである。

本州に入つて最初が新津というのもいただけでない。四三三という時刻に停車するほど需要があるとは思えない。せめて新潟を停車するべきではないか。鈍行で三〇分ほどの距離だから新潟着五〇〇頃となるだろう。新津から信越線經由で長岡へ抜けるというのがJR西日本の言い分かもしれないが、新潟を外して五一七着の長岡を入れる理由にはならないのではないか。

次の綾は寝台特急を降りた敦賀駅でのことである。駅の改良工事がほぼ出来上がつて近代的になつている。明るくてゆったりして使いやすそうである。駅から次の行動のために観光案内所へ行き必要な資料を手に入れて、ふと、前を見るとトイレの掲示版がある。丁度

便意を催したところだったので、ちよつと小急ぎにトイレに入つて用を足した。一息ついてさて後始末をと考えて見回したのだが、あるはずのトイレレットペーパーが見当たらない。これには慌てた。戦後すぐの頃には新聞紙を活用して落とし紙に使つたこともあるが、このときは、新聞も手許にないのだ。ポケットというポケットを探し回つたのだが、落とし紙の代わりになる紙はまるでない。何の始末もしないでパンツを履くことはできず、思案に余つて、取り出したのは大型のハンカチだった。これなら当座の始末には使えると閃いてハンカチを広げた。使用後はしつかり石けんで洗つて、ポリ袋に収めて何食わぬ顔でトイレを退出した。出たところで気づいたのがトイレレットペーパー販売機の存在だった。

駅をどんなに改良して近代化しても、トイレにトイレットペーパーの備えを欠いては何が近代化であるか。何がお客のためであるか。全国の駅トイレでトイレットペーパーを備えていない駅はほとんどないはずだから、利用者はそれが普通だと思つている。仏作つて魂入れずとはこのことではないか、と八つ当たりするほかないのであろうか。よしんばトイレレットペーパーは備え付けがないのだとしても、「当手洗いにはトイレ

ットペーパーの備えはありません。各自でご持参の上  
ご使用ください」ぐらいの注意書きを扉の前面に掲げ  
て利用者の注意を喚起すべきであろう。旅先で初めて  
利用する私のようなケースは決して稀ではないはずで、  
JR西日本には強く注意を促したいと思った。

敦賀では、「ぐるっと敦賀周遊バス」に乗って日本  
海さかな街へ赴いた。直線なら一〇分とかからない距  
離にあるが、敦賀市としては、気比神社や水産卸売市  
場、小牧かまぼこ、日帰り温泉施設リラ・ポート、原  
子力センターのあつとほうむなどを見せたいという政  
策判断で四〇分をかけてさかな街へ導いてくれた。場  
内の小さな魚屋で昼食を摂り、七〇軒ほどが集う魚市  
場を見て回った。小浜線との時間事情があつてさかな  
街には一時間滞在で次の周遊バスで敦賀駅へ戻った。  
以前に敦賀へ来たときも鯖のへしこを買つてお土産に  
した記憶があり、今回もここでへしこがお土産の仲間  
入りをした。

三日目の宿は気山の虹岳島（こがしま）荘で、二度目  
の利用である。日本の秘湯の宿で、温泉は少し温めで、  
入りやすい。夕食はなかなか豪華で、お決まりのお造  
りや卵とじの他、牛肉のステーキ、フグちり、茹でカ  
ニなどが供せられた。アルコールは前日の寝台特急の

ための泡盛八重泉のボトルが半分残っていたのでこれ  
で済ませることにした。氷を頼んだところ会計は三〇  
〇円だった。

四日目は京都。敦賀一〇三九発のサンダーバード一  
二が強風のため湖西線経由から北陸線経由で走つた  
め三〇分ほど遅延となり、京都着は一一一〇頃となつ  
た。今回の京都でカミさんの目指したところは昼飯で  
うどん屋の岡北へ行くこと、二日がかりで今宮神社脇  
のあぶり餅と北野天満宮前の粟餅を食すこと、それに  
錦市場を歩くことの四つだった。それぞれに少々の手  
がかりがあり、その手がかりを頼りにまず岡北を訪れ  
ることにした。この手がかりは書物だが、案内には  
不親切で、住所はあるが電話の記載がなく、最寄り駅  
の情報も手薄だった。しかし、とりあえず、その他の  
手がかりはなく、目印としての京都市動物園を頼りに  
出向くほか術はないのだった。動物園前までは市バス  
が連れて行ってくれたが、降りてからどこを行けばい  
いのか見当もつかないまま交差点まで前進したところ  
待ち合わせの行列のあることに気づき、確かめるとこ  
れが岡北だった。行列中から食事の注文が問われ、中  
のテーブルに案内されると、さほど待つ間もなく注文  
した丼が運ばれてくるのだった。

推薦本の曰く「かの老舗料亭菊乃井の主人・MYさんもご贔負といえば、そのクオリティがおわかりいただけるはず。まずはシンプルにきつねうどんを。そして、そのMYが好きだという天とじ井も絶品。たっぷりのだしでユルユルにとじた玉子の滋味深さといったら！」という具合で、私たちも天とじ井に小井のあったおかげできつねうどんともども食すことができたのだ。美味いことは確かに美味いが、本が言うほど滋味に感心することはない感じだった。

岡北から少し歩いて二〇三系統のバスに乗り、船岡山で降りた。バスの運転手さんに教えてもらったのだが、ここから今宮神社は歩いて行けるといふ。バス停の斜め前に朱い鳥居があつて神社への入り口となっているのは明らかだった。歩いてみると四、五〇〇メートルほどの距離で遠くはないのだが、今のカミさんには荷が重いらしく、途中五、六回は立ち止まって、一息入れながらという行脚となつた。今宮神社の東門から入つて出ると左右にあぶり餅を商う店が向かい合っている。この前は右手のかざりやで買ひ求めた記憶があるが、カミさんは左手の一和だった言い、一和に入る。一人前一五本のあぶり餅は昼飯後のことで二人で一人前を頼んで味見とした。とりあえず、来ることに

していたところを消化したという意識だった。この後、今宮神社の門前を走る四六系統のバスに乗り四条大宮ここから嵐電で嵐山。嵐山からは歩いて公立学校共済の花のいえに到着した。一六時頃のことである。

花のいえの風呂は温泉ではないが、なかなか大きくていい風呂である。夕食は特別なコース料理を避けて普通の夕食を注文した。これまでカミさんや娘、孫がここに泊まるときは大抵別コースの料理を頼んでいたらしいが、カミさんは、薄味過ぎて味がしなないとしきりに言っていたので注意していたところ、普通食は別に薄味過ぎることはなく、量もまずまず、味もまずまずというところだった。焼酎の小瓶を見つけて注文し、氷を頼んだら、レモンの薄切りと梅干しがかなりついてきて勘定が気になるほどだった。ところが会計処理を見ると、これがすべて無料となつていたのでびっくりした。前の日の虹岳島荘で氷三〇〇円なりが請求されたのは上述のとおりで、トワイライトでの扱いと並べてみると、三者三様というのが面白い。

花のいえの従業員は皆きびきびして好感が持てたものだから、夜布団敷きに来た仲居さんに全部で何人ぐらい従業員がいるのか尋ねたところ、二人は顔を見合わせて知らないと言う。個人情報保護ということもあ

って答えを渋っているのかと思ひ、翌朝フロントで同じ質問をしてみると、全部で五〇人ぐらいだが、パート勤務が多く、正規職員は一〇人ぐらいだという答だった。布団敷きの仲居さんはパート従業員で本当に知らなかったのかもしれないと思つた。

五日目は花のいえを出て嵐電嵯峨から路面電車に乗り、帷子ノ辻乗り換えて北野白梅町へ赴いた。ここから北野天満宮まで三〇〇メートルほど、この距離ならカミさんにも歩ける範囲である。途中、すぐき漬けの手作り屋があつてちよつと立ち寄つた。すぐき漬けは息子の好物だからである。

北野天満宮は参道から本殿へ至るスペースが無料だが、中にある梅園は有料で六〇〇円なりの観梅料を必要とするようである。梅園に入らなくても境内の梅は見事で丁度満開という具合だった。私は初めて訪れたのだが、北野天満宮はなかなかの名刹である。天満宮の前にある沢屋という栗餅屋で栗餅を食べた。漉し餡ときな粉のコンビがかわいい。見ていると、結構お土産に買うお客も多く、店内で食す客とほぼ半々といったところだ。聞けば、その日のうちに食すなら持ち帰りも可能だということだったので、一箱一〇個を土産用に包んでもらつた。

天満宮からは四条高倉まで路線バス。四条高倉から一筋北へ上がると錦市場に出る。錦市場は相変わらずの感じだったが、お客は随分減っている様子で、その分活気が薄いように思われた。人気のある市場が寂れていくのは残念で、何とか集客力を維持し向上させる努力を関係する皆さんに望みたいものと思つた。

この日は予定より一本前の小田原停車で帰宅の途についた。お陰で、一八時頃までに家に着くことができて、栗餅は無事娘、孫の許に届いた。メールの点検、ものの整理、洗濯など、旅から帰るとやるべきことがあれこれあつて、つい夜が更けていくのは常のことである。

### 冠 省

その節はありがとうございました。お陰で寒いところで長いこと待つこともなく宿に着くことができました。旅をするといつもなにかを書き残して、後日同人誌に寄稿することにしております。今回も纏めることができましたので、これも何かの縁とばかり、写しをお送りする次第です。文中に披露したとおり、第一滝本館にも宿泊の記憶があり、因縁を感じたところです。

機会があれば女将のご厚意を受けたいものと思いま  
すが、さて、いつのことになりますやら。  
取り急ぎ、まずはお礼まで。ホテルのますますの繁  
栄と女将の一層のご活躍を祈ります。

不 一

二〇一三年三月一八日(月)

〒二四三・一〇〇二一

厚木市岡田 五・一一・六・二〇六

岩佐 晴夫



トワイライトへ



北野天満宮にて